さいたまゴールド・シアター 第1回公演

船上のピクニック

1年の成果をこの舞台にぶつける！

作 岩松 了 × 演出 蜷川幸雄

昨年5月に始動した「さいたまゴールド・シアター」は、およそ1年間にわたる活動の成果を、岩松 了の新作書き下ろしという、これ以上ない作品で披露することになった。46名全員に役をつけるという難題に取り組んだ岩松氏が、脚本に込めた想いとは何か。届いたばかりのメッセージとともに、この作品とさいたまゴールド・シアターの魅力に迫る。

蜷川幸雄の「年齢を重ねた人々が、その個人史をベースに、身体表現という方法によって新しい自分に出会うことは可能ではないか」という呼びかけに始まった「さいたまゴールド・シアター」。

昨年、大稽古場で、7月『Pro-cess ～途上～』、12月『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』（清水邦夫作）と、プロセスとして実施した2回の公演は、いずれも大きな話題となった。

そして、2007年6月、いよいよ、この1年間の集大成となる第1回公演を行う。会場は、彩の国さいたま芸術劇場小ホール。今、団員たちは、稽古場で、公演の稽古に取り組む日々だ。一瞬一瞬を逃さず捕まえようとする各々の真剣な表情から、この公演にかける思いの強さが伝わってくる。

上演作品は、“今”を代表する劇作家のひとりである岩松了氏によるゴールド・シアターのための書下ろし。〈演出家蜷川幸雄 × 現代や人間の深層を独特の視点で浮かび上がらせる岩松作品 × ゴールド・シアター〉という掛算は、いったいどんな世界を見せてくれるのだろうか。そこから立ち上がる新たな演劇の可能性に期待が高まる。

今号に、その岩松氏がメッセージを寄せてくれた。岩松氏らしい語り口の中には、ゴールド・シアターの本質が垣間見えている。

さいたまゴールド・シアターは、その設立を発表した日から、様々な方面から注目を浴び、稽古風景や2回の中間公演も多くのメディアで取り上げられた。そのほとんどは高齢者で劇団をつくるという画期的、意欲的な取り組みに賛同し、共鳴するもので、特に2回目の中間公演“Pro-cess 2”『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』（写真）は、年間のベスト1として挙げた劇評家もいるなど大好評を得た。以下に主だった記事の抜粋を掲載する。

「二回目の中間発表会である『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』は、劇団の可能性を存分に感じさせた」 高橋豊（『テアトロ』2007年3月号）

「演じるプロではない人々の存在そのものから生まれる表現の豊かさ」 山口宏子（朝日新聞　2006年12月2日）

「老婆たちの狂気の乱舞が高齢者劇団の年輪がものをいって説得力があった」 安達英一（『悲劇喜劇』2007年3月号）

またがれる快感

岩松 了

なにせ46人の登場人物ですから、人間関係の妙を描くことに心血を注ぐ私としては「いかにも多すぎ」だったわけですが、そこにあえて挑戦してみようと思ったのは、他ならぬ蜷川さんの依頼だったればこそです。その46人が55才以上の人たち（多くは60代、70代）だというのも魅力でした。この46人と出会いたい、と私は思ったのです。それは彼らがその年で演劇と出会った、その出会いに宿るはずのドラマを私にも分けてもらいたい、そう思ったからです。なにしろそれは、演劇の根源にかかわることかもしれないではありませんか。

蜷川さんは、秀（すぐ）れた演出家でありながら、作家の方が演出家より上だという態度で、この私ごときにすら、接して下さる。しかしながら実は、この姿勢に私は或る脅威を感じ、ちょっと冷や汗をかいたりもするのです。すでに私は蜷川さんに「演出されている」のではあるまいか。その脅威です。こんなやり方で劇作家を緊張に追いこむなんて実に憎い。そして私はと言えば、この感じがたまらなくて、蜷川さんにこの身をあずけよう、そう思ってしまうのです。

私自身も演出家と呼ばれることはありますが、心のどこかには、やはり演出家ではないという思いがあります。そして演劇を演劇たらしめるのは演出家をおいて他にないということも重々承知しています。先に根源という言葉を使いましたが、演出家はやはり戯曲が在る前に、人間が演劇を志向する不思議、そのことに思いを馳せているにちがいないのです。だから、蜷川さんがこうしてゴールド・シアターを持ったことは、話題性などということとは無縁で、実に、実に演劇的な行為であるのだと私には思えるのです。演出家としての資質が、それも秀（すぐ）れた資質が《人間が演劇を志向する不思議》をまたごうとしている。そこに劇作家として参加しようとしている私もまた、またがれているのにちがいないのです。

STORY

海上を進む豪華客船。一昨年の大量解雇でリストラされたベテランのホテル従業員たちを乗せたその船は、再就職先となる、とある国で建設中のリゾートホテルに向かっている。それぞれが不安や希望など様々な思いを抱えつつも、その船上では仲間の結婚を祝う宴が催され、その最中にボートで漂流していた難民たちを助け上げる事態に……。言葉の通じない難民たちが同乗した船の上では、不協和音や猜疑心が満ちる気配が覆い始め、事件の予感が……。

さいたまゴールド・シアター 第1回公演

『船上のピクニック』

【日時】6月22日（金）～ 7月1日（日） 全9公演

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 小ホール

【作】岩松 了　【演出】蜷川幸雄　【出演】さいたまゴールド・シアター

【チケット（税込）】発売中　全席指定3,000円

さいたまゴールド・シアターの歩み

2006年

2/1～28　団員募集　応募総数　1,266名

3/14～30　オーディション（15日間、延べ78時間）
受験者数　1,011名
合格者数　48名（男性21名, 女性27名）

彩の国さいたま芸術劇場 小ホールで行われた本格的なオーディションに、緊張を隠せなかった参加者たち。
© Arnold GROESCHL

4/21　団員48名初顔合わせ
さいたまゴールド・シアター
設立記者発表

多くのメディアが取材に訪れた記者発表。

5/1　レッスン開始（5/1現在団員数：47名）
レッスンは、月～金曜の週5日、
午前午後1コマずつの1日4時間程度。

【レッスン内容】
基本レッスン：演出・ヴォイス・
ムーヴメント・ダンス・日本舞踊

ダンスのレッスンを受ける団員たち。
最初は体も思うように動かなかったのだが…
©山下恒徳

7/28～8/1　中間公演「Pro-cess ～途上～」
（全6公演）
会場：彩の国さいたま芸術劇場 大稽古場

〈夏季休暇〉

5日間の公演の蜷川の採点は、初日が55点、千秋楽が80点。人前で演技をすることが成長の糧になることを皆、実感した。
©幸田森

9/13　レッスン再開（9/13現在団員数：46名）

12/1～4　2回目となる中間公演を実施
さいたまゴールド・シアター“Pro-cess 2”
『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』
（全5公演）
会場：彩の国さいたま芸術劇場 大稽古場

〈冬季休暇〉

2007年 1/24　レッスン再開（3/31現在団員数：46名）

6/22～7/1　さいたまゴールド・シアター 第1回公演
『船上のピクニック』